

伝統文化としての剣道の教育価値に関する研究

発表者 増山 都
指導教員 日下 裕弘

キーワード：剣道、伝統、文化、教育価値、「一」

1. 緒言（研究目的）

本研究は、我が国における「伝統文化」としての剣道の本質や特性の探求をもとに、保健体育における剣道の教育的価値について考察していく。すなわち、学校における剣道教育の現代的価値を追求していくことを目的としている。

2. 研究方法

見田は、価値とは、「主体の欲求を充足させる客体の性能」のことをいうとしている²⁾。さらに作田は、それは「望ましきもの」、「犠牲を伴ってでも成就すべき望ましきもの」であらねばならぬとしている³⁾。

伝統とは、ある集団が文化的または精神的領域において所有するものであり、過去から現在に及ぶ連続性において価値判断を前提とする主観的な観念である。すなわち伝統は、プラスの価値判断を含むもの、その存続が希望されている慣習のことである。

文化は、ドイツ系の歴史哲学的な概念と英米系の文化人類学的な概念とに大別でき、現在はドイツ系の文化概念を含みつつも、英米系の文化概念、「より良き生、人間性の向上、人間の幸福」をめざして生きる人間が、その対自然、人間、社会的活動過程を素材として工夫・形象化してきた生活様式の総体として、文化をより広義にとらえる立場が一般的である。この広義の文化概念には、思想、理論、イデオロギーのような内面的、精神的な概念的な文化、こうした観念や思想が社会体系に取り入れられた外面的、形態的な制度・行動文化、および、それらを実現するために人間が創り出し利用する道具としての物質文化が含まれる。

本研究では、学校教育の「武道 剣道」で求められている現在の教育内容（現代的教育課題）と、剣道そのものの性能である日本の伝統文化としての剣道の特性を明らかにすることで、両者の間に成立する教育価値を考察していく。

3. 学校教育における剣道の位置づけ

これまで多岐にわたって重複し、機能的でなかった我が国の縦割りスポーツ行政が一本化され、平成 27 年 10 月、文部科学省の外局としてスポーツ庁が設置され、「武道の振興」が重要な国家的課題の一つとされた。また、教育の目標として、教育基本法 2 条 5 項では、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とされ、学校教育法第 21 条 3 項では、「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とされている。さらに、中学校

学習指導要領「保健体育科」改善の教育方針では、「その学習を通じて我が国固有の文化に、より一層触れることができるよう指導のあり方を改善する」と記されている。

中学校学習指導要領解説保健体育編（2008）「武道 剣道」を見ると、技術面のことだけでなく剣道の伝統文化に関することが多々記されている。例えば、「相手を尊重」、「伝統的な行動の仕方」、「礼、礼儀を守る、礼法」、「伝統的な考え方」、「相手を尊重し合うための独自の作法、所作」、「自分で自分を律する克己の心」などが挙げられる。また、「伝統的な考え方」では、「武道は単に試合の勝敗を目指すだけではなく、技能の習得などを通して礼法を身に付けるなど人間としての望ましい自己形成を重視するといった考え方」と記されている。

また、中学校学習指導要領解説、高等学校学習指導要領解説ともに、「知識、思考・判断」の「知識」に暗黙知についての記載があり、「（中略）指導に際しては、勘や直感、経験に基づく知恵などの暗黙知をも含めた知識の理解をもとに運動の技能を身に付けたり、運動の技能を身に付けることで一層その理解を深めたりするなど、知識と技能を関連させて学習することが大切である」とされている。（図 1）

4. 伝統文化としての剣道

現代剣道の起源は、江戸時代中期にあり、竹刀や防具が開発されたことで、それ以前の相手を倒し、自己の安全をはかる闘争の技術から、実用性を離れて、武術の習得を目的とし、そこに価値を見出すものへと変化した。中林は、同時にこれらが、「芸」や「道」となる文化と呼べるものに発展してきたと述べている。実用性を持った運動が、その実用性を離れ、社会的にも目的と意味が発見され、人間にとって価値ある行動様式となったとき、その身体運動が文化と成立したのである。

伝統文化としての剣道は、稽古や修行を通しての人間形成が様々な観点から強調している。また、先人の考えが「型」、「技」となり、現代に受け継がれているということが、伝統文化としての剣道の特性であり、体験することによって十分それを体得することがその要諦である。単なる技のみに磨きをかけるのではなく、剣道には共に磨き合う隠れた精神の極みを追究し、相手に勝つ前に自分自身に打ち勝ち、自分自身を磨く、相手を尊重するといった身体文化があり、そこには自身対自身、自身対相手とが織りなす無限の道程がある。図 2 は、その内容を「気・剣・体の一致」という理想型にあてはめて整理したものである。

5. 結論：剣道の現代的教育価値（「一」）

「剣の道とは修行である」。初心者であっても、高段者であっても、稽古・修行は常に怠ることのできないものである。単に技術を習得し、技を磨く

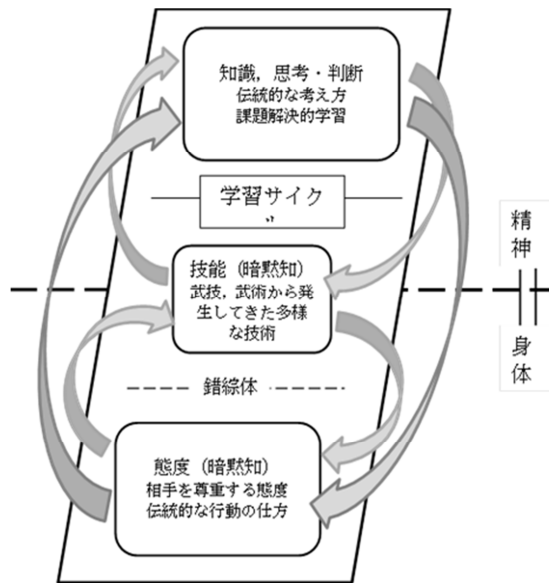


図1 武道における「知識、思考、判断」、「技能」、「態度」の相関関係

ためだけでなく、精神を鍛えるのが剣の道であり、むしろ、身体と精神が「一体」として存立していなければ極められないのが剣道である。武道修行には、技と心、身と心は不可分「一体」であり、心・技・体が「一体」となって人間形成に深く結びつくとする伝統的思想がある。また、剣道には、「知行合一」や「身心一如」、「剣心一如」「気剣体の一致」、「心・技・体」、「三位一体」「理業一致」といった、知識と行動、心と行動、心と知識はそれぞれ「一体」とであると説く格言が多い。つまり、修行を積んでいくうちに、心・技・体は「一」になっていくのである。

例えば、「萬法帰一」という言葉がある。「萬法」とは、この世の全ての現象、森羅万象を言い、「一」とは万物の根源で、絶対的な実相、現実、真理のことで、大宇宙のすべてのものは一から生じ、一に帰るという考えである。言い換えると、あらゆるものが関わりあって存在し、それらは一つにつながるといことである。

グローバル化がますます進む現在、国際社会で活躍できる日本人、世界から信頼される日本になるために、我が国固有の伝統や文化を一層重視することで、日本人としての在り方や、人としての生き方を再考することが大切である。本論では、「一」に向かって自己を修練していくという、剣道の本質的な教育価値をめぐって考察してきた。国際化する現在、剣道を通して改めて日本人としての「一」の姿を学び、自己の在り方、生き方について考え、自らの力でより良き人間へ成長できるようにしていくことが学校教育における剣道の教育価値であると考えられる。

6. 今後の課題

- ①日本人の在り方生き方について、道徳教育もふまへ、具体的に追求すること。
- ②剣道の「修行」と体育授業の「楽しさ」の矛盾を克服した体育授業の在り方を考察すること。
- ③他の分野の教育にも生かしていくこと。

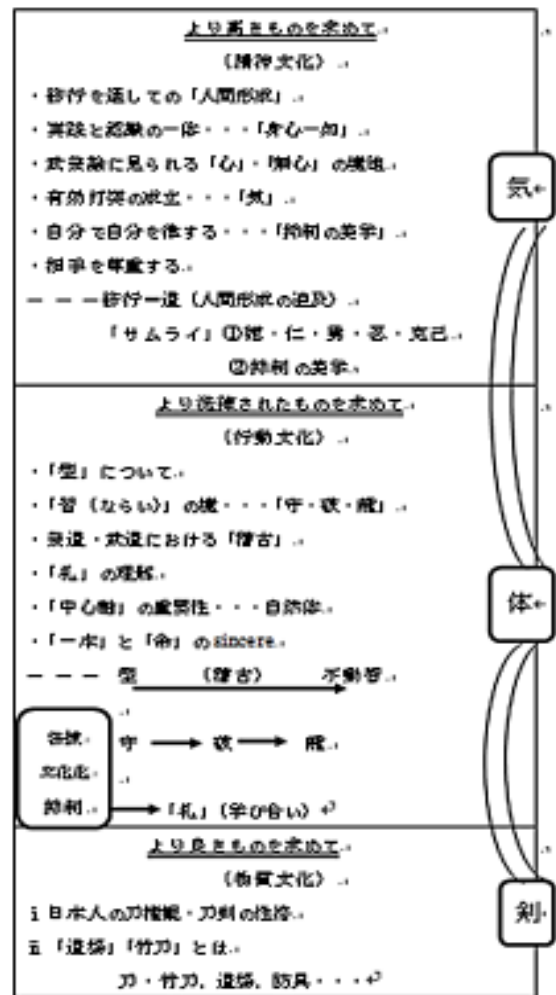


図2 伝統文化としての剣道の本質と特性

7. 文献

- 1) 田中守、藤堂良明、東憲一、村田直樹 (2006)、武道を知る、不昧堂出版、pp.58-73、102-141
- 2) 見田宗介 (1966)、価値意識の理論、弘文堂、pp.14-24、198-203
- 3) 作田啓一 (1972)、価値の社会学、岩波書店、p.450
- 4) 中林信二 (1988)、武道論考、中林信二先生遺作集刊行会、pp.4-55、139-143
- 5) 寒川恒夫 (2014)、日本武道と東洋思想、平凡社、pp.146-147、263、362
- 6) 市川白弦 (1994)、沢庵 不動智神妙録・太阿記・玲瓏集 禅入門 〈8〉、講談社、p.172
- 7) 西村秀樹 (2009)、スポーツにおける抑制の美学—静かなる強さと深さ—、世界思想、pp.86-98
- 8) 日本武道館剣道専門部会 (2009)、剣道を知る辞典、東京堂出、pp.18-19、114-117、182
- 9) 元吉晶子 (2009)、伝統文化としての剣道授業のあり方、茨城大学卒業論文 ほか